

## 児童館長として考えていること

池田英郎 錦林児童館長

### 子どもたちのしんどさ

みなさんが子どもだったとき、毎日の楽しみはどんなことでしたか。どんな遊びをしていましたか。ご自身の子も時代と比べて、今の時代をどのように思いますか。

先日「2020年度の小中学生の不登校と自殺者数が過去最多」と報道発表されました。子どもの育ちをめぐる課題は以前からたくさんありますが、コロナ禍の中でさらにしんどさが拡大している状況があります。これは私たちの問題でもあると感じ、「しんどさ」の中身についてあれこれ考えました。

4年ほど前、建築家の安藤忠雄さんのこんな言葉が新聞で紹介されていました。「今の子供たちの最大の不幸は、日常に自分たちの意思で何かができる、余白の時間と場所を持っていないことだ」。

### 子どもにとって大切な“主体性”と“余白”

自分が「やりたい」と思うことをやれたり、言ったりすることより、大人や誰かが決めた正しさに従い、効率的に「やらされる」時間や空間が増えているのでは、と私も感じていました。

その「やらされ」が、コロナ禍によって、さらに加速。「納得していないけど、やらなければならない」と「不要不急なものはやらない」が増えました。そうすると「やりたい」より「どうでもいい」というような気持ちが増え、人は主体的でなくなるのではないのでしょうか。

私は、その主体性をとても大事に考えてきました。自分の外側にある「正解」を常に気にして過ごすことより、子どもが自分で決めたり、選んだりすることを大切にしたい。「遊び」はまさに主体的な行為で、自分の意思でやるからこそイキイキとしていられます。学校の勉強には正解がありますが、遊びの世界には正解なんてなく、どうなるかわからないドキドキがあります。初めから結果が見えている遊びはワクワクしませんし、同じ遊びでも、大人が評価の目線を入れるとたちまち面白くなくなる、なんてこともあります。

「遊んでばっかりいて…」とネガティブな表現もされますが、不要不急のムダなものでは決してなく、ハンドルの「あそび」のように必要不可欠な余白であったりもします。また、余白の部分では「大人→子ども」という一方的な関係だけではなく「大人⇄子ども」という双方向の関係性も生まれやすく、「あーだ、こーだ」と話しながら共にルールを決めたりしながら過ごすこ

とができます。そういう意味でも、児童館は学校外の居場所として、スキマや余白に価値を見出してきました。

残念ながら、合理的でシステム化された社会の中では、そうした余白はムダなものと思われてしまい、学校や習い事と比べてあまり大事にされません。それでも私は、決して不要不急なものではないと発信していきたいと思います。

### 正解のない問題と向き合う

では、大人の社会ではどうでしょうか。以前、「制度が整う前の時代のほうが、自由に活動できて良かった」というヘルパーさんの本音を聞いたことがありました。もちろん、制度や仕組みを整え、効率的なサービスを持続的に行う必要性はあります。働き方や経営のことも考え、福祉サービスの効率化や合理化も必要です。

ただ、福祉の仕事の中でも、「サービスを提供する人→される人」という関係だけでなく、利用者と対話をしながら双方向の関係が生まれ、「もっと一緒にこんなことができたらな」と思える瞬間があったりすると思います。具体的な支援の中でも「これが正解」というものがない時もあり、共にそれぞれの意見を持ち寄って、互いに話し合っ進めることもあると思います。しっかりとした仕組みの中にも、そんな正解がない面白さを感じられる余白を共に意識できるといいなと感じています。

時間はかかっても、法人内のみんなで「やってみようね」や「心配ごと」を語る場づくり、余白づくりを地域共生社会推進の取組としても試みたいと思っています。



池田館長／写真右

# 第6回実践事例報告会 / 10月20日

## 京都福祉サービス協会 第6回実践事例報告会によせて 福富昌城 花園大学社会福祉学部教授

京都福祉サービス協会の実践事例報告会は2015年度にスタートして、今回で6回目を迎えます。第1回目から関わらせていただき、協会内の各部署の工夫を凝らした実践の報告に、毎回頭が下がる思いをしています。

実践現場では、支援が難しい事例についてケース会議を開催することは多いのですが、何らかの工夫をして支援がうまくいった実践例の共有の機会、実は少ないのです。しかし、こうした実践例の中にこそ、現場実践の質を高めるための鍵が隠れています。

協会は、京都市内で最も大きな法人であり、さまざまな部署があります。それぞれの部署では職員チームが工夫を凝らした実践をしておられます。それを協会内で共有することは、職員の実践力向上や支援の質の向上につながります。また、他部署の職員が工夫している姿を知ることが、協会への帰属意識を高め、自分たちも工夫してみようという意欲の醸成にもつながります。

今後は、こうした実践を報告する機会を外部に公開していくこともお考えいただければと思います。法人外への実践の成果の共有が、法人の理念である「くらしに笑顔と安心を」をさらにすすめる方法の一つになると思います。



### 報告①

### 福祉避難所開設運営訓練 ～高齢者福祉施設 紫野～

紫野地域包括支援センターの担当する圏域は、西陣織に従事されていた高齢者が非常に多く、また住宅も密集している地域で火災や地震への不安が大きく、従来から地域を上げて防災に力を入れておられました。地域ケア会議で、大規模災害の避難所運営に詳しい佛教大学福祉教育開発センター後藤至功講師から「一緒に福祉避難所運営訓練を開催しませんか？」との提案をいただき、地域の災害訓練と施設の福祉避難所運営訓練を合同で行うこととなり、紫野の全部門と地域住民、教育機関、行政等が参加する大規模な訓練となりました。

まずは、阪神大震災で被災した施設の避難訓練、福祉避難所運営訓練の見学。関係機関や地域の方、施設の職員が個々の役割を認識し、具体的かつ主体的に行動していること、マニュアルを整備し、動きを可視化すれば災害時に動けることを学びました。

実際の訓練では、施設職員を役割ごとに7班（総務、設備、食事、入所受入、特養、包括、居宅）に分けました。施設内の交流を促すためにも部署横断で組織し、地域や災害に関心をもち職員個々が考え、主体的に動く組織づくりを心がけました。訓練当日の要配慮者役をしてくださるボランティアは、地域の民生委員や高齢者の方へ依頼しました。

当日は、9:00～訓練を実施。施設では福祉避難所運営訓練、学区では学区の災害訓練を行い、連携を取りながら、避難に来られた

		随時連携
		学区災害訓練(小学校:要配慮者) ↔ 福祉避難所運営訓練(施設)
9:30～	要配慮者への聞き取り開始(北区役所)	
10:30～	学区避難所内要配慮者の選定終了	対象者の仮状況確認票(役所より)
	要配慮者ブースへ移動(要配慮者班)	対象者の状況確認作業と 2階受入場所検討開始
11:30～	要配慮者:迎えの車両に乗り込み	小学校へ要配慮者迎え
12:00～		要配慮者:施設到着
12:30～	昼食&けが等の仕込み	昼食
13:00～	順次受付	受付開始
14:00～		施設2階にてアセスメント
15:00		まとめ



訓練当日の様子

要配慮者を福祉避難所に移動する訓練を行いました。訓練後の振り返りでは職員から、「準備までの期間が大変であったが、たくさんの方が注目する中でやりきったことは誇りに思う。普段関わりの少ない部署の職員や地域住民と関わってよかった」、要配慮者役となったボランティアからは、「地域住民として、災害が起きた時の近隣施設の役割が分かって安心した」との声が聞かれました。地域住民のサインを逃さない、動きをキャッチするためには、職員が地域に出向かないと見つけられない、関心を向けることで何かが見つかるということを参加者と共有できました。

## 報告②

## 銅駝美術工芸高等学校との連携 ～伏見事務所～

AssocieNo.5で紹介した銅駝美術工芸高等学校との地域連携企画「ホームヘルパーをデザインする」が軌道に乗ってきたことを受け、企画を立ち上げた伏見事務所が、3年に渡る交流の成果を発表しました。

合同研修会では、伏見事務所の企画の中心メンバーである小林統括マネジャーと小泉ケアマネジャーが、3年間の関わりを発表。連携が持続できたわけは、協会側の「介護の魅力を伝えるために、知恵をもらう」ことと、高校側の「社会人として、福祉（介護）のを知る」という双方の目的が相乗効果をもたらしたことが大きかったといえます。授業の中では、高校生が今まで経験したことのない介護の世界や、その中で働くヘルパーの仕事、そして人材不足のことなどを丁寧に伝えたことで理解が深まったと感じています。同時に、幅広い年齢層にヘルパーのすばらしさを知ってもらおうということ、デザインを通して目に見える形にしていくという相互活動によって、お互いの関係を深めていくことができたことも報告されました。



学生の作品から広報として採用したリーフレットとクリアファイル

研修会での感想、意見を聞くと、「福祉の世界にとどまらず、他分野（異業種）とつながることで新たな発想が生まれることを改めて実感することができました」「他機関、地域と協力してWINWINの関係をつくっていくことが必要なのだとあらためて感じました」「大きなねらいは持ちながら、相手の持っている力を活かしていくことが大切なのだと感じました」「私もやってみたいと思いました。早速何かを始めてみようと思います」など、自分でできることを探していくきっかけと、やる気を生み出すことができたこと、そして、それぞれの施設や事業所で取り組んでいく参考になったのではないかと考えています。

今後、さらに連携授業を継続して相互に学びあえる機会を大切にしていきたいと思っています。また、地域に還元するような取組も検討していきます。

## 報告③

## 地域資源をつなぐ子ども発信「地域防災」～明德児童館～

2016年から始めた「子どもたちが防災について学び、地域住民に啓発することにより、地域の防災意識を高める」という取組（AssocieNo.12で紹介）。多様なあり方を認め合い、支え合う地域社会をめざして、子どもたちが地域社会で持てる力を発揮し、社会で「役立っている」と感じ、「自分たちの力で社会を変えていける」と感じて育っていけるよう、それを応援して下さる方々を子どもたちと結びつけて取組をすすめていくのが、児童館の地域福祉促進活動です。報告会では「協働」に焦点を当て、どのように連携して実施しているかを発表しました。

日頃から、児童館は、していること、したいことを発信しています。まわりに関心をもって積極的に交流していると、専門性や経験をもつ個人や団体とのつながりができ、相手の「こんなことがやりたい」という思いと、児童館のめざす「地域共生社会」とを、うまく擦り合わせて活動を組み立てていくことができます。その際に

- ① 思いや活動に関心を持ち、おもしろがったり共感したりし合う関係
- ② 「児童館でなら、自分のやりたいことができるかも」と思ってもらえる
- ③ 連携先（相手）にとってプラスになることを考える

ということを意識しています。そして、職員の業務量も資金面も、児童館が無理せず等身大でいることが継続の鍵と考えます。子どもたちが積極的に活動し、相手にとってプラスであれば、財源の確保も含め児童館で足りないところに力を添えてくださり、結果的に、職員に負担がかからず相手から学ぶことができ、職員の育成の機会にもなります。

コロナ禍で声を出して歌えないため手話歌に取り組んでいたことから、聴覚言語に障害のある方が楽しく安心して生活できる地域づくりをめざす団体『あたたかいハート』さんとつながりができ、今年度の防災演劇に参画していただくことになりました。

出会いはすかさずキャッチ！です。

今回は、コロナ禍ということで初めてのオンライン開催となりましたが、Wi-Fi環境にも配慮し、比較的スムーズに行うことができました。福富先生のコーディネートにより、各部門の事例のポイントを分かりやすく理解することができ、参加者からは、地域共生社会の実現を目指す中で、ベクトルを同じ方向に向けるための有意義な時間になった、非力で何もできないと思い込んでいたが、これならできるのではないかと考え方を改めることができた、といった、とても前向きな意見が多数聞かれました。

この研修は、参加できなかった職員へのYouTube配信も行う予定です。後日案内しますので、是非、ご覧ください。



子ども・学生・地域住民・俳優が演じる防災演劇  
(2018年度 中央本部職員 山本周氏)

## 地域共生／よこ糸通信

沼田康史 事務局次長

## 職場リレー エッセイ③

## THEME／地域との一体化

高齢者福祉施設 本能

今年の6月を皮切りに、毎月第3水曜日の19時から、地域共生カフェ（以下カフェ）を開催しています。協会内外から魅力的な講師を招き、いろんな人が楽しみながら繋がれる機会となるよう取り組んでいます。

11月24日（水）に行われたカフェでは、ケアハウス久我の社の松本功施設長と山科事務所の本好則子所長のお二人が登場し、松本施設長は、若かりし頃の「牧場でのお仕事経験」、本好所長は「大好きな登山（トレッキング）と山の魅力について」写真等を交えながら話をしてくださいました。

松本施設長は、北海道の牧場で、牛（肉牛）との触れ合いを通じて、牧場勤務の苦労話や楽しみ、北海道の自然の厳しさ等実体験を交えた話をリアルにされ、また、介護の仕事に就くまでの紆余曲折も話してくださいました。本好所長からは、趣味である「山の魅力」について、山に登るようになったきっかけや楽しさを、絵画と見間違えるほどの美しい写真やクイズを交えて教えていただきました。参加者は、「牧場で働きたい!」、「山に登ってみたい!」と思われたのではないのでしょうか。

お二人の話を聞くことで、あらためてチャレンジしてみる大切さ、チャレンジした先に見える景色の素晴らしさを感じることができ、貴重な時間となりました。

カフェでは、協会内外の方をお招きし、色々なお話をさせていただきます。開催時間のこともあり、参加が難しい場合もあるかと思いますが、ゆくゆくは配信も検討していますので、今後のカフェに乞うご期待ください!



本能は2005年9月2日の開設以来、地域との連携・協同、そして一体化を大事にしてきました。正しくは、開設以来ではなく、開設前からです。と言うのも、本能は京都市が計画概要を提示してから地元が了承するまで3年以上を要するなど、地元の反対が強く、開設前の地元説明会でも地域の方から大変厳しいご意見や心配事をお聞きすることがあったため、開設の数か月前から自治会や町内会と協議を重ねてきました。また、開設当初から特養のご入居者は、町内会に入っておられますが、当時、特養のご入居者が町内会費を払っているという施設を聞いたことがなかったため、ご入居者やそのご家族に対し、どのように説明し、理解していただくのかなど、様々な課題がありました。そんな中、ご入居者が一住民として認められ、施設が地域に根付いていくためにはどうすればよいのかを考えていく中で出した答えが、私たち職員が地域に出て行くということでした。それまでの特養の多くは、ボランティアなど施設に来ていただくことはあっても、施設から地域に出て行くことがほとんどありませんでした。本能の地域は昔から染色産業の盛んな町でしたが、それが衰退していく中で、まちおこし・まちづくりのイベントなどを積極的に開催されていて、私たちも

ボランティア（業務の一環）としてそのイベントに参加させていただくことにしました。ギブアンドテイク



毎年施設内で開催される地蔵盆。数珠回しもご入居者・町内の方と一緒にいきます

ではなく、ギブアンドギブの姿勢を通して、私たちを受け入れてくださるようになり、今では地域の様々な行事への参加、企画会議、定例会議への出席が当たり前になっています。地域共生社会も地域包括ケアも、ネットワークが重要ですが、ネットワークは目に見えません。見えるのは、「人」です。その「人」と「関係」を大切にしながら、「地域と一体化」していくことで法人理念の実現に寄与できるものと思っています。



### 令和3年度社会福祉功労者及び ボランティア功労者に対する厚生労働大臣表彰受賞 高齢者福祉施設 本能/井上章 施設長

この度、厚生労働大臣表彰をいただくことになり、大変驚いています。

身に余る表彰に、大変光栄で、身の引き締まる思いです。当法人でも初めての受賞とのこと、その意味でも私個人ではなく、法人のこれまでの地道な社会福祉活動が評価されたものであり、たまたまそれを代表していただいたものと思っております。今後も微力ではありますが、法人一体化を踏まえ、社会福祉の推進に寄与できればと思います。ありがとうございました。

